

聴くこと、そして発信すること

小見川香代子

「言葉にこだわる」

私の中のもやもやしていた霧が、晴れるような感じがした。
いろいろなところで、言葉は一人歩きしている。
また、その言葉のイメージがつくる社会的な影響は大きい。

「負担」と「支え合い」では、まったく違うイメージを想像する。

余計なものを無理やりというイメージより、一緒に力を合わせてというイメージの方が、自分も支えている等参加型の社会をイメージさせる。

「カウンセリング」ということばも、巷に氾濫しすぎている。

心理学的な立場からと言うより、身の上相談から個人指導まで入り交じってしまっている。
指導は一方通行のコミュニケーションなのだからまったくべつものだし、相談というのも相手に意見を乞うものだから、当事者の中にある考えや思いに寄り添うというという意味合いとは異なる。

「薬局」ということばも、今や一人歩きしはじめている。

薬を渡す場所としかとらえられていない。

薬は、もともと毒なのである。

効果があるから主作用とよび、それ意外は副作用とよぶ。

その期待されない作用を軽視・無視した結果、社会的に引き起こされる人災的な健康被害を薬害と呼ぶ。

薬害で苦しむ人はたくさんいる。

社会的地位さえなくしてしまうことだってある。

副作用報告をして基金から補助が出ることは一般の人に知られているのだろうか。

コミュニケーションもとらずに、症状や体調や生活背景を知ることはできない。

薬を渡すことは、人と人のかかわりなのである。

人間関係が希薄になっているいまだからこそ、富山の薬売りがしていたように、「おだいじに」のことばと、こころのなごむ紙風船が必要なのではないのだろうか。

言葉をきちんと解釈することは本当にたいせつなこと、だから私はご本人に学びたい。

身をもって体験している不自由の数々、その中で出てくる言葉や感情から、何ができるのか考えたい。めまぐるしく変わる時代の中で、大切に守りたいものを伝えたい。

そして、すこしだけ薬の知識のあることが役に立つ自分でいたい。

人として出会うこと、話すこと、楽しむこと、それはしあわせの原点だと私は思う。